

編集後記

遊星人編集幹事の野津翔太です。今回の遊星人は吉田有宏さんの2024年度最優秀発表賞受賞論文のほか、Blenderによる科学的可視化入門、連載記事も火星衛星MMX 2本立て・木星氷衛星JUICE・金星あかつきなど、充実したラインナップです。引き続き奮っての記事投稿、お待ちしております。また、今号には博士の学位を取得した会員に自己紹介して頂くNew faceの記事が2本掲載されています。New faceの記事は随時募集しております。学位取得後3年以内または 学位取得後、日本惑星科学会に入会してから3年以内の会員が対象です。会員に広くアピールすることができる機会ですので、ぜひ投稿をご検討ください。

先日(2025年7月19日)、国立科学博物館の原川紘季さんにお声がけ頂き、上野本館の天文学普及講演会にて講演(「アルマ望遠鏡で探る惑星形成 -太陽系の起源に迫る」)をさせて頂きました。この天文学普及講演会とはとにかく歴史が長く、終戦翌年の1946年1月から月1ペース(毎月第3土曜日の午後)でほぼ休みなく開催され、私の講演回が917回だったそうです。天文月報1978年4月号に掲載された「開館100年を迎えた国立科学博物館」という記事によれば(web公開されたバックナンバーで確認できます)、当初は日本天文学会との共催による講演会として発足し、1977年12月時点で372回と博物館の中で最も長命な催物である、との記述がありました。その後も現在に至るまで切れ目なく続いていて、太陽系科学

や系外惑星、惑星形成などに関連した講演も多数行われてきたそうです。この80年の間に天文学そして惑星科学分野は大きく変化・発展しましたが、その間ずっと開催され続けてきた天文学普及講演会の長い歴史にも思いを馳せつつ、今後も1000回を超えて、その時代ごとの最先端の天文学・惑星科学研究に触れる事ができる場として末長く続いていく事を願っています。

今回は久々の国立科学博物館訪問だった事もあり、講演の前に常設展示コーナーを見学させて頂いたのですが、そちらで小惑星探査機「はやぶさ」初号機の再突入カプセルの実物を久々に見ることができました。こちらのカプセル、2023年7月からは国立科学博物館・上野本館にて常設展示されているようですが、帰還直後の数年間は全国の博物館・科学館などで巡回展示されていて、2011年2月には京都大学総合博物館で特別展示されていました。博物館開館以来最多とも言われる来館人数だった事もあり多くの人手が必要とされ、当時京都大学理学部の1回生だった私もアルバイトの一人として、館内展示の説明やお客さんの誘導のお手伝いをしていました。当時は職業としての研究者への意識はまだ薄く「はやぶさ」帰還の偉業にただ感動していた学生ではありましたが、それ以前からあった惑星形成分野への興味・関心がさらに高まる事に繋がった出来事であっただけに、今回改めて再突入カプセルを見て感慨深い気持ちにもなりました。(編集幹事 野津翔太)